

第31回日本医療薬学会公開シンポジウム報告

平成20年11月3日（文化の日）、1年中で最も晴れが多いという予想に反して、今にも降り出しそうな曇天の中、神戸学院大ポートアイランドキャンパスにて第31回日本医療薬学会公開シンポジウムが開催されました。幸いにも午後から天気が持ち直し、また折から学園祭のさなかで人出が多く、なかなか会場にたどり着けなかったとの苦言も頂きましたが、202名の参加を得て、熱心な討論が繰り広げられました。

今回のメインテーマは「薬・薬・学連携 ～薬剤師の連携は地域医療に何をもたらすか～」とし、神戸学院大学薬学部において会場をご提供頂いた上、4人のシンポジストおよび2人の座長は、その殆どを阪神地区の薬剤師がつとめ、さらに兵庫県病院薬剤師会がスポンサーとなっているラジオ番組のメインキャスターとそのご友人を特別講演に招き、全体が地域連携活動のような形になりました。

第一部のシンポジウムでは、兵庫県病院薬剤師会会長・西田英之氏が、「神戸薬学ネットワーク10年の歩み」と題して神戸地区での薬・薬・学連携の実際について紹介されました。なおこの活動のコアメンバーの中から、現兵庫県薬剤師会会長および現兵庫県病院薬剤師会会長が輩出しており、メンバーのアクティビティの高さが表れていると思われます。第2席は兵庫県病院薬剤師会および兵庫県薬剤師会の両副会長を務めておられる鈴木芳郎氏が「診療報酬改定と地域連携」をテーマに、特に後発医薬品をめぐる地域薬局と病院の連携や、退院時共同指導の実例について説明されました。第3席のファルメディコ株式会社社長・狭間研至氏（医師）は「多職種連携と情報共有がもたらす新しい薬局薬剤師像」と題して、ご自身の薬局経営および薬剤師教育について述べられ、新たな薬剤師職能としての在宅医療について提言をされました。最後に神戸大学医学部附属病院薬剤部副部長の角山香織氏からは「地域薬局と大学病院の連携」、即ち神戸大学附属病院薬剤部の地域薬局との連携、および市民への情報提供についての活動報告がありました。その後、神戸朝日病院薬剤部長・金啓二氏とかつはら薬局管理薬剤師の桂木聡子氏お二人の座長のもとで、フロアからの質問・ご意見を交え、活発な討論が展開されました。

日本医療薬学会法人化準備特別委員会の乾賢一委員長から、日本医療薬学会のこれまでの歩みと、法人化に向けての動きについて説明を頂き、休憩を挟んで、特別講演その1、立原啓裕氏による「患者からみた薬剤師」、特別講演その2、末松義密氏によるミニコンサート「音楽は心を癒すサプリ」が行われました。立原氏は体調が悪いにもかかわらず、番組の合間の短い時間を縫って駆けつけて下さり、「患者としては薬剤師にとっても期待をしているし、信頼もしている」というメッセージを頂戴しました。また「感じてそれを共有すること」の重要性も強調されました。体験したことをただ「体験」で終わるのでなく、そこから何かを「感じる」こと、そしてそう感じた「理由」を考え他人と共有することで、新たな何かが生まれる、というのは、コミュニケーションの基本でありますし、また患者さんや他の医療職との情報共有、心のつながりを作る上で欠かせない事だと思えます。また、立原氏が最後までおられないため、

最後を締める意味でミニコンサートを行って下さった末松氏は、バイオリン・マンドリン・ギターを駆使しつつ、心にしみる音色と歌声を聴かせてくださって、参加者の心を癒して下さいました。

会の終了にあたり、神戸学院大学薬学部長の福森義信先生からは「コミュニケーション教育の目指すところについて、今日はっきりと分かりました」という嬉しいお言葉を頂戴いたしました。

最後になりましたが、ボランティアで参加して下さい、シンポジストおよび座長の先生方、お手伝い下さった皆さん、そして会場の提供と、準備段階から大変にご尽力下さいました、神戸学院大学薬学部の福島昭二先生、上町亜希子先生、森本泰子先生にこの場を借りて深謝致します。

神戸大学医学部附属病院薬剤部

平井 みどり